

おにぎりへの想い

所沢市立北野中学校 二年
田 邊 かおり

日本でも、古くから人間の食生活の中心であったお米。私の生活においても一番身近であり、大好きな食べ物だ。お米はどんな食べ物とも合うし、毎日食べても飽きることはない。これといった主張はないのに、誰もが知っている食べ物だ。この夏の猛暑の中、連日剣道の厳しい稽古に打ち込めたのは、おにぎりのおかげといっても過言ではない。私にとっておにぎりは、スーパーフードだ。ご飯を引ききたる海苔はパリッと香ばしく、塩気の効いたご飯は、口に含むと一層甘味を増す。くたくたの体の奥深く沁み渡り、疲れ果てた体は蘇る。この夏休み中、暑さにめげることなく部活動に励めたのは、部活後に毎日おにぎりを食べたからだ。おにぎりのパワーは、好きなお米だからというだけではないと思う。なぜならおにぎりは、握ってくれた人の温かな気持ちと一緒に詰まっているからだ。私の母は毎日五時に起き、お腹の空いた部活後に、直ぐご飯を食べるようにおにぎりを持たせてくれる。母の作るおにぎりは、とても大きい。食べていると崩れてくるが、崩れたおにぎりを口に含みながら、きつとお腹を空かせている私を思っ握ってくれているのだろうと感じる。古今東西、子供を思う母の愛情は、健やかな子供の成長につながってきたのではないかと思う。

この夏戦争展に行った私は、感謝の気持ちが必要ない自分の生活に反省をした。戦争の悲惨さは何となく感じていたものの、それは戦地での事だけだと思っていた。しかし戦争というものは、残された家族も同様苦しい生活であり、戦争が終わった後も続いていたのを知った。私が特に印象に残っているのは、子供たちの生活である。戦争孤児は、日本だけでなく、色々な場所に存在していた。そして生きていく為に手段を選ばず生活している姿は、想像を絶した。毎日の生活が、食べ物を得て生き延びていくためなのだ。家族と共に暮らせる恵まれた子供でさえ、お米はぜいたく品。玄米をビンに入れ棒で何時間も突く。主に子供の仕事で大変だったようだ。ご飯といっても、お米に他の食べ物を混ぜ量を増したり、卵の殻を細かくつぶし、ふりかけ代わりにして食べることで、カルシウム不足を解消していたとも知り、昔の人の知恵に感心すると共に、今の食卓とは全く違うものだと知った。現在の私たちが目にするお米は、精米されたお米だ。様々な産地の多種多様なお米を選んで買うことができる。当たり前の光景に慣れている私は、あまり考えたことがなかったが、現在の食生活はぜいたくなことだと改めて実感し、ありがとうと心の中で言いながら、お米を食べている。

「あっ、お米がなかった！」母がよくいう言葉だ。我が家は、十日で十キロペースでお米がなくなるらしい。他の家と比べ、多いのか少ないのか聞いたことないが、五人兄弟、恐らくお米の消費量が多いのだろう。お米があれば安心と母は言う。ご飯にみそ汁、納豆は、我が家の定番。食卓に並ばない日はない。そして姉は、お米一粒一粒に神様がいる、決して残してはいけないと、亡き父がよく言っていた話をするので、私たち兄弟はご飯を残すことがない。私はこれからも、美味しくお米を食べられることに感謝し、私の体を作っている大好きなお米を沢山食べ、いつか母親になったら、子供たちに美味しいおにぎりを作り、父の大切にしていた言葉を、子供たちにも伝えたいと思っている。